



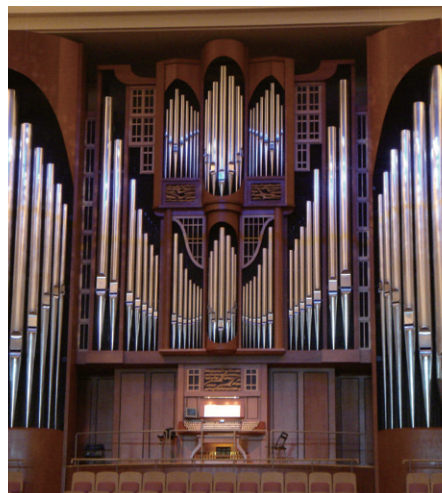
長く広く愛され続けている 「クラシック音楽」の歴史

中世西洋音楽 西暦400年頃～1400年頃

約1000年間にわたる歴史を誇る中世西洋音楽は、初期キリスト教の音楽からルネサンスの到来に至るまで続き、西洋音楽の基礎を築き上げました。

キリスト教とグレゴリオ聖歌

4世紀頃のヨーロッパではキリスト教の普及が進み、ヨーロッパ各国の教会で聖歌が盛んに歌われるようになります。やがてローマ・カトリック教会がキリスト教の中心となっていき、7世紀から8世紀にかけてローマ典礼のための聖歌が大きな発展を遂げました。9世紀頃にローマで大成された「グレゴリオ聖歌」は、12～13世紀にはカトリック教会公認の聖歌としてヨーロッパ中の教会に普及しました。



クラシック音楽のルーツ「ポリフォニー」

9世紀後半になると「オルガヌム」という多声音楽の技法が登場し、単旋律・無伴奏が特徴のグレゴリオ聖歌に別のパートが追加されていきます。「ポリフォニー」というこの多声音楽は、主旋律がなくそれぞれの旋律が均等なバランスで構成されているのが特徴であり、当時の音楽に新たな深みと複雑さを加えました。ポリフォニーは、その後12世紀から13世紀にかけて、フランスを中心に発展していきました。

中世の世俗音楽

教会音楽とは対照的な、民衆の間で歌われる世俗音楽も盛んになっていきます。騎士階級出身の吟遊詩人たちが歌う歴史的な出来事や伝説、愛や冒険に関する物語は、王宮や城での宴会、市場や村の広場など、さまざまな場所で歌や詩を披露され、広く人々に受け入れられました。吟遊詩人は、国によって呼び名が異なり、フランスではトルバドールやトルヴェール、ドイツではミンネジガーと呼ばれていました。

古代西洋音楽の楽器

パイプオルガン: 紀元前3世紀頃に北アフリカで生まれたと言われる、水力によって空気を送り込む「水圧オルガン」が起源で、鍵盤を弾くことでパイプに空気を送り込み、振動させて音を出す楽器です。9世紀頃からパイプ式のオルガンとして開発され、13世紀頃に教会の楽器として確立し、教会音楽に欠かせない伴奏楽器として活躍しました。



中世西洋音楽の作曲家

ギヨーム・ド・マショー (Guillaume de Machaut): マショーは14世紀のフランスでボヘミア王兼ルクセンブルク伯ヨハンの司祭ならびに秘書であり、詩人・作曲家として国際的に名声が高かった人です。マショーは当時用いられていたほとんどの音楽形式による曲で知られており、マショーが作曲しポリフォニーのミサ曲として初の完全な例である「ノートル・ダム・ミサ曲」は、15世紀半ば以降一般化するミサ曲の創作を先取りしていました。



楽譜の始まり「ネウマ譜」

9世紀末までは聖歌は全て口承で伝えられていましたが、9世紀終わりに「ネウマ」とよばれる記号が歌詞の上に手書きで書かれるようになり、グレゴリオ聖歌が記されるようになりました。現在の「楽譜」の祖先と言われている「譜線付きネウマ譜」が登場したのは、11世紀頃です。最初は1線のみが使われましたが、よりはっきりと音の高さを示そうと線の数が次第に増えていきました。12世紀中頃に登場した4本線の記譜は13世紀頃に定着し、少しずつ現在の楽譜の形式に近づいていきます。